

後期高齢者が抱く感謝の特性とその意味づけ —ライフストーリーインタビューから—

立命館大学
応用人間科学研究科
臨床心理学専攻
宮森あさ子

後期高齢者が抱く感謝の実態を把握した上で、個人の内的な個人史の中で感謝の意味づけがどのように語られるのかを検討必要があると考え、本研究では後期高齢者が抱く感謝が個人の人生の中でどのような特徴を持ち、意味づけられているかを明らかにすることを目的とした。したがって分析1においてはM-GTAを用い「後期高齢者が抱く感謝の特徴」について検討し分析2では、個人の内的な個人史の中で感謝の意味づけがどのように語られるのかについて事例研究法を用いて検討していくこととした。

まずインタビューガイドの質問項目の検討を行うために予備調査を行い、その結果から本調査で用いるインタビューガイドを再度検討した。本調査ではそのインタビューガイドに沿って75歳から90歳までの後期高齢者6名（男性3名女性3名平均年齢80.83歳）を対象に感謝についてのライフストーリーインタビューを行った。ライフストーリーインタビューによって語られたデータをM-GTAの方法論に沿って分析し（分析1）、その後事例研究を行った（分析2）。

その結果、後期高齢者が抱く感謝に関して全16のカテゴリ【抽象的な信仰心】【前向きに受け止める力】【他者との比較】【健康である満足感】【家族とのかかわり】【両親からの恩恵】【子育てにおける喜び】【次世代への継承】【学びの喜び】【勤労の喜び】【目上の人からの気遣いや温かさ】【他者からの働きかけ】【両価的な気持ち】【今の状況に対する満足感】【助け助けられる喜び】【未来への準備】が見出された。この結果から青年期における感謝の特徴とは異なった性質のものとして、【抽象的な信仰心】【前向きに受け止める力】【次世代への継承】【未来への準備】が抽出された。【次世代への継承】【未来への準備】に関しては老年期における心理社会的課題に関係する結果となり、統合へ向かう様子が見受けられた。

そしてライフストーリーという手法を用いたことによって、反省を含んだ過去の経験も何かしらのきっかけによって、徐々に感謝の念を抱かせる経験になったり、意味づけが変化している様子も明らかとなった。

今後感謝に関する研究で得られた知見を教育、福祉、医療等様々な現場で応用していくためにはまず各発達段階に応じた感謝の特徴をより詳細に整理することが重要なのではないだろうか。